

金沢

かわら版

11

尾張町しこせ通りで

の宝生庵に並び称されるほどに盛んな「加賀宝生」の通称を得たり。

そして、こうした代々のお殿様の文化的教養のお相手を務めて商いする尾張町商人は、いつしか金沢市民に文化を広めるかすがいとなっていたのではなからうか。

(石野 瑋一＝尾張町若手)

ばそれまでだが、利家は信長の価値観を見抜いていたのではないか。加賀国金沢の地で、信長の意思を察いで、前田家の繁栄の基盤を文化価値に置いた。

藩政官の細工所に職人を集め、後世、「百工百職」といわれる文化事業を行ったり。江戸

た。

「ちごころ奇れ。このキヤマンの輩(こほ)はの、遠くオウシンのタの國王が使っていたものじや。あちらの茶碗(ちやわん)はの、千利休の愛用するものじや。それにはこの度の戦のほうびとしてこれらの品をつかわせう」といったかごころか。

加賀口万石とは、前田家があえて武力で天下を取らず、「文化」と「経済」で日本一を目指した実力を表すもの。これだけは徳川家といえども、口を出させない本物に徹して。

名古屋には織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の天下人をたたえた「三英傑祭り」というのがある。残念ながら、ここでは前田利家の出身はない。

利家の先見

歴史をひもとけば、決して天下人のチャンスがなかったわけではない。むしろ、周囲の状況を判断して、意識して身を引いた節が感じられる。あるいは、平和な時代を先取りしていたのか。

一説には、信長は武力の後に来るものを見越していたという。戦をして勝利すれば、敵国の土地を部下に与えることはそれまでの常識。けれど信長は、全国を統一してしまっただけには、もう与えるべき土地がなくなることに気付いていた。

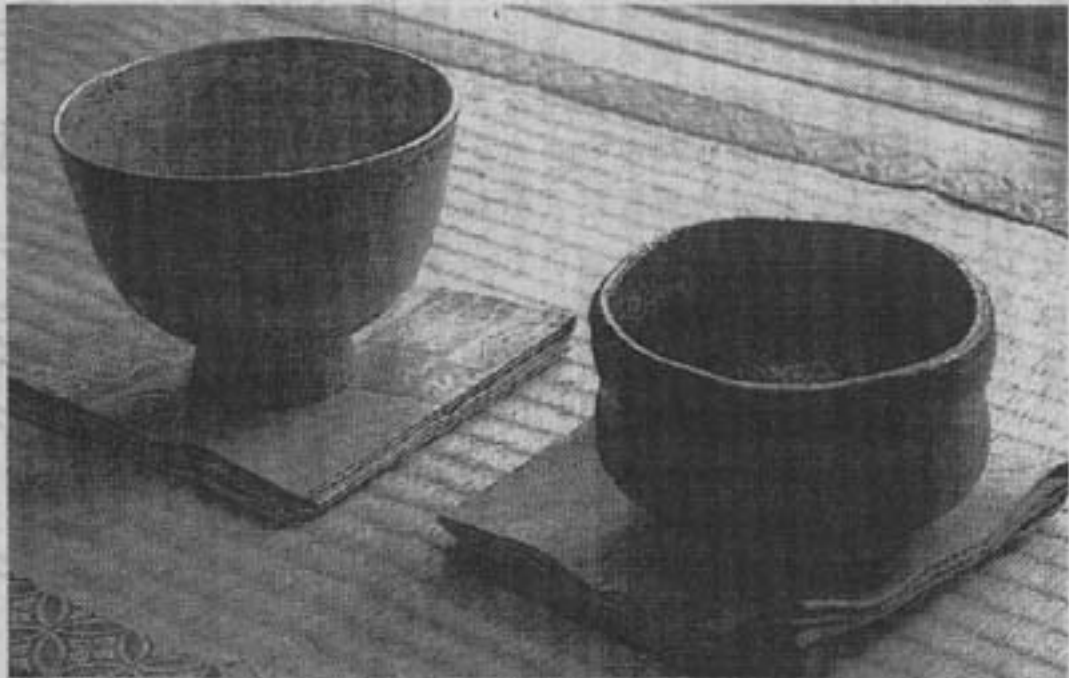
土地に代わるものは何か。何を与えれば部下は満足するか。新しい価値観を発見することにかけては天才的な信長。彼は「文化」にそれを見いだし

天下人目指さず 繁栄の礎に文化

ともあれ、彼の部下に与える

ほろびは、いつしか土地だけでなくなくなっていったのは事実。しかし、秀吉は朝鮮の土地に代わり、家康以降は難所をつけて諸藩を改易して、土地をならい回してしたり。先進的な価値観は引き継がれないまま。

歴史の特殊な解釈といわれ



茶碗

尾張町の旧家には、約三百年前につくられた「黒茶碗」などが何枚なく置いてある